

硫黄島からの手紙

父が硫黄島に出征したのは、29歳の頃だったと思います。私はその時まだ母のお腹の中でした。戦時中に父が硫黄島から母に宛てた手紙は13通あります。最初の4通はハガキで、5通目以降は封書で送られたそうです。

最初は、隊にはどんな仲間がいて、こういう出来事があったとかが書いてありました。私が生まれたのが11月だったんですが、12月に届いた手紙には『男子出生の知らせあり』と書いた紙が演習から帰ったら机の上に置いてあって『知らせを聞き、非常に誇りに思う』ということが書いてあります。その他にも生まれた喜びが書いてあって、まさに『親バカ』丸出しですよ。その後の手紙には、



▲硫黄島から送られた手紙

私の写真を見たんでしょね、さすが俺の息子だ」と書いてあります。次の手紙には「できたら足形、手形、願わくば顔形まで欲しいけど、顔形はさすがにかわいそうだからよしにして」と書いていました。おそらく母は、足形と手形と写真を送ったと思うんですけど、それを見たかどうかの手紙は返ってこなかったようです。制空権はともとなかったし、制海権も獲られて船が行かなかつたんでしょ。それ以降の手紙はありませんでした。

父の眠る硫黄島へ

私が硫黄島へ初めて行ったのは、平成21年に厚生労働省が主催する硫黄島慰霊巡拝に参加した時でした。それから毎年、硫黄島を訪れています。

平成24年の遺骨帰還特別派遣に参加した時は、遺骨収集場所が父の所属した145連隊の壕に近い場所でした。壕内の温度は60度程度で、天井から熱気が噴出してきている箇所もありました。このような苛酷な状況の中で、日本軍が得た精神力・忍耐力の強さは、本土にいる肉親、家族を死守する強い覚悟の表れではなかつたのではと感じました。

後世まで語り継ぐ

私が枕崎市遺族会の会長に就任したのは、平成27年3月28日です。遺族会の会員も高齢化で

つたのではと感じました。休憩中は、父も眺めたであろう真つ青な空と海を見ながら「父はどんな思いでこの眺めを眺めただろう。この暑い壕の中で水もなく、どれだけ苦しかったんだろう。どんな思いで自身を奮い立たせていたんだろう」と思うと何とも切なく、悔しい思いに駆られました。

平成26年度からは配偶者の事業参加も認められたので、妻と2人で参加しました。戦時中に父が母に送った手紙に「ミズイカのスルメが珍しく元気がついた。仲間が作ってくれた羊羹がおいしかった」と何度も書いてあったので、その2つをお供えしました。私の父は、妻の父と高校の親友であり、指宿で父の部隊が出征する最後の演習行軍中にばったり会い「俺はこれから戦地に行く。後のことは頼む」と、数分間会話したのが最後だったそうです。私は父に「私はあなたの大親友だった方の娘さんと結婚し、3人の子どもと6人の孫に恵まれて幸せに暮らしています。国家の安泰、家族を守る決意で必死に戦ってくださったおかげです」と手を合わせて報告しました。

会員数が減ってきていて、昨年で正会員(遺族)が19名、準会員(遺児等)が624名です。遺族会の目的は、会則にもあるように、戦没者遺族の福利厚生増進はもちろんですが、戦没者の英霊を顕彰し、平和日本の建設に貢献することです。

枕崎神社の横に、昭和38年に遺族会が建てた慰霊塔があるんです。以前は遺族会で大きな慰霊祭をしてたようですが、最近では行われていません。遺族が高齢になってできなくなつたんでしよう。遺族会の運営もやはり難しくなっているように思います。でも、遺族会の目的を続けていくためには後世まで伝え続けていかなければならない。孫・ひ孫の代まで、日本遺族会でも動きはあるようだし、県内でも実際に、孫・ひ孫の会が発足しています。私は枕崎でも孫・ひ孫の会を結成して、慰霊祭



▲片平山に立つ慰霊塔



枕崎市遺族会会長 桑原茂樹さん(住吉町・70)

を続けていきたいと考えています。やはり伝えていく人がいなければならぬですよ。その中心にあるのは、遺族会ですから遺族会はずっと続けて、語り継いでほしい。私自身も以前はそこまでそういう気持ちは強くなかつたんですが、硫黄島に行くようになって考えが変わりました。こういうことは続けていかないとけないよなと。

平和な世を未来へつないでいくために

長きにわたった戦争の時代。戦争では、多くの尊い命が奪われました。現代の日本の暮らしからは、その頃の出来事は想像しがたいものです。しかしそれは今から70年前に起きた真実です。命を捧げた英霊、厳しい時代を生き抜いた先人たちが築いた歴史の延長線上に、今の平和な世があります。 私たちは戦争があったという事実を決して忘れてはいけません。そして、その悲しい体験を、二度と繰り返してはいけません。 今ある平和は、当たり前のものでないはず。平和について真剣に考え、後世に伝えていくことが、平和を未来へつなぐ一歩になるのではないのでしょうか。 平和の尊さを考え、未来へつないでいくのは、誰でもない私たち一人ひとりです。戦争の悲惨さと平和の尊さについて、もう一度みんな考えて、さらなる平和への第一歩を踏み出しましょう。

枕崎空襲の写真

昭和20年7月29日、枕崎は米軍の大空襲を受けました。その3日後の8月1日、米軍機が撮影したとみられる枕崎市街地などの写真です。

この写真は、南九州市知覧在住の國崎潤さんがインターネットオークションで入手したものです。



▲8月1日、枕崎市街地の様子。枕崎大空襲で大きな被害を受けたことが分かります。

平和をつなぐ取り組み

7月29日の枕崎大空襲の日に1分間の黙とうを

枕崎市では、平成3年12月に「平和都市宣言」を行い、さきの大戦で大きな犠牲のあった7月29日をはさんだ週間を「平和週間」としています。

空襲のあった7月29日午前7時40分に、サイレンを吹鳴しますので、市民の皆さんもこの日時に1分間の黙とうをお願いします。

戦後70年企画写真展 我がまちふるさと枕崎

枕崎七夕の会の主催で開催します。戦後の焼け野が原から先人たちが血のにじむような努力で枕崎を復興していった様子などの変遷を、懐かしい写真とともに振り返ります。観覧は無料です。

会期 8月12日(水)～16日(日) イベント(16日) ・ミニライブ 午後3時～ ・人文字づくり 午後6時～ 会場 南浜館(第1展示場ほか)



枕崎市平和都市宣言

わたしたちの郷土枕崎市は、先の大戦により市街のほとんどを焼失し、かけがえのない多くの尊い人命と財産を失った。

世界の恒久平和は、人類普遍の願望であることをふまえ、広島・長崎に原爆を投下された世界唯一の被爆国として、核兵器の廃絶を訴え、戦争の惨劇を二度と繰り返してはならないことを決意する。

枕崎市は、戦争の焦土の中から立ち上がり、市民の不屈の精神と英知によって、今日南薩摩の中核都市として限りない発展を続けている。

わたしたちは、日本国憲法の精神にのっとり、この平和で豊かな郷土を次の世代に引き継ぐために、世界平和と人類の福祉を希求し、ここに「平和都市」を宣言する。